

# 巨大津波と国土強靱化

内閣官房参与・京都大学大学院教授  
藤井聡

# 「稲むらの火」の物語と、7つの教訓

## 7つの教訓

### ● 濱口の高潔な精神が、村人全員を大津波から救う

- ・ 1854年11月5日の夜大地震(安政南海地震)が勃発。大津波が紀州藩広村(和歌山県広川町)をまさに直撃せんとしていた。
- ・ その時村人たちは津波が来ることも知らず「逃げる」そぶりを全く見せなかった。
- ・ 「高台」に居を構える村の郷士、濱口梧陵は、その様子を目にし、「このままでは全員が津波で死んでしまう」という事を認識。そして、彼らを救うためにどうすべきかを瞬時に考え、自らの収穫したばかりの稲を積み上げた「稲むら」に火を放った。
- ・ 何も知らない村人たちは、「郷士の家が燃えている！！」と驚き、その火を消すため、皆、高台の濱口の家・稲むらに駆け付けた・・・結果、村人たちは全員救われた。 ※  
この物語は1937(昭和12)年から10年間にわたり小学校国語読本(5年生)に掲載。

### ● 「被災による地域消滅」から広村を救った濱口の「防災減災ニューディール」

- ・ 津波によって家も仕事を無くした村人たちは途方にくれ、多くが村から立ち去ろうとした。
- ・ このままでは村の「消滅」は必至。これを乗り越えるため、濱口は再び私財をなげうち、「津波堤防」を作ることを決意。4年の歳月をかけて高さ5 m、長さ600 mの堤防を完成させた。
- ・ この事業によって村人たちは震災後始めて「仕事」ができ「所得」を得ることができ、それを元手に再び、広村で暮らし始めることが可能となった。
- ・ この広村堤防は、約100年後の1946年の大津波(昭和南海地震)から村の大部分を守った。

1) 「リーダー達」が何をなすべきなのか——その精神性

2) 人間はカネより尊い

3) 最悪の事態のイメージの不可欠性

4) 避難の不可欠性

5) ソフト対策の重要性(リスク・コミュニケーション)

6) 震災復興における財政政策(防災減災ニューディール)の不可欠性

7) 堤防・ハード対策の抜本的有効性(命だけでなく資産を守る。つまり街を根こそぎ守るのが堤防)

# 平成の稲むらの火：国土強靱化

1. 「**最悪の事態**」についての徹底的イマジネーションを、  
国土強靱化のすべての取り組みの原点に据える

(3: 最悪の事態のイメージ)

2. 国内全計画の「**上位計画**」としての「国土強靱化計画」の法的設置。

(2: 人命はカネより尊い)

3. **ハード**対策と**ソフト**対策の融合

(4、5、7: 避難・ソフト、堤防・ハードの不可欠性)

4. **徹底的財政・防災減災ニューディール**による東北復興、日本復興

(8: 財政政策(防災減災ニューディール)の不可欠性)

「国土強靱化」の詳細は、こちらを。

巨大地震Xデー(光文社)

